

# 真源撰『往生要集裏書』について

上 杉 智 英

## 序

恵心僧都源信（九四二—一〇一七、以下源信）の『往生要集』はその序に「念仏の一の門に依りて、聊かに経論の要文を集す」と記されるよう、諸経論疏から念仏に関する文を集めた要文集であるが、『扶桑略記』二七、永観三年（九八五）四月の条に「天台沙門源信、『往生要集』を撰す。天下に流布せり」と記されるよう、その影響は釈家のみならず文学・絵画・建築等にまで波及している。鎌倉期に著された長西（一一八四—一二六六）の『浄土依憑経律論章疏目錄』<sup>(3)</sup>（以下『長西録』）には、

往生要集裏書 一卷 真源証揚律師  
山僧  
往生要集依憑記 三卷 同  
往生要集修念仏作法 一卷 昌譽  
往生要集勘文 六卷 平基親俗

往生要集外典鈔 一卷 同  
往生要集疑問 一卷 澄憲  
往生要集科文 三卷 称名庵  
往生要集料簡 一卷 黒谷  
と『往生要集』の注釈書が八点見受けられ、『総浄土依憑章疏』<sup>(4)</sup>では、

往生要集釈 一卷 黒谷上人  
往生要集鈔 石泉院覚什僧都  
往生要集鈔 五卷 妙香院

と更に三点が追加されている。これら末疏は『往生要集』が如何に読まれたかを窺う上での根本史料となるものであるが、それらの嚆矢としてあげられるのが真源（一〇六四—一一三六）撰『往生要集裏書』である。

先行研究によれば本書は佚書とされ僅かに逸文が紹介されて

いるが、これは誤判であり『往生要集裏書』の現存状況を正しく伝えるものではない。拙論の目的は従来逸文のみと考えられてきた為言及されることのなかった『往生要集裏書』全体像の把握にあり、その為の基礎作業として先ず著者である真源の行実、著述を概観し、次いで先行研究の検証、原本調査による諸本の現存状況の確認を行う。その上で内容・構成について言及し本書の性質を明らかにしていきたい。

## 一、真源について

### 1、行実

真源には所謂「別伝」はなく「往生伝」にもその名はみえず、出自・俗縁等は明らかでない。生没年について興福寺本『僧綱補任』<sup>(5)</sup>、保延二年の条には、

山 真源 保延二年月日入滅 七十三

と記されており没年は保延二年（一一三六）、生年はそこから逆算して康平七年（二〇六四）であることが知られる。ただし彰考館本『僧綱補任』<sup>(6)</sup>、保延三年の条には、

六月六日卒 八十 或七十七

の記述がみられ、いずれが事実であるか確定することはできない。<sup>(7)</sup>

次に『三國伝記』巻七、「真源法師值死亡師事<sup>山王利請事</sup>」には、和云、叡岳東塔南谷勝陽房、真源法橋云人アリ。四明山上ニハ乗<sup>シテ</sup>一乗宝車<sup>一</sup>、観<sup>シ</sup>解脱究竟理<sup>一</sup>、三密瑜伽<sup>ハ</sup>、中<sup>ニ</sup>至<sup>ハ</sup>一念道場<sup>一</sup>、修<sup>ニ</sup>本覚法身<sup>一</sup>旨<sup>一</sup>。非<sup>ズ</sup>夢<sup>一</sup>、非<sup>ズ</sup>現<sup>一</sup>、而山王権現社頭<sup>ニ</sup>参<sup>ル</sup>、大宮楼門前<sup>ニ</sup>、真源師範也、嚴算阿闍梨<sup>ニ</sup>参会<sup>ス</sup>。「公失<sup>ハ</sup>玉<sup>レ</sup>人<sup>一</sup>也。何<sup>ニ</sup>御座<sup>一</sup>ゾ」ト申ケレバ、嚴算答<sup>テ</sup>云、「其事ナラン。我存生時、仏法志深<sup>ク</sup>、多<sup>ク</sup>聖教習学セシカ共、出離生死<sup>無<sup>シ</sup>志<sup>一</sup></sup>、常名聞利養思住<sup>シテ</sup>、五道輪廻<sup>業無<sup>シ</sup>尽<sup>一</sup></sup>、忽可<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>惡道<sup>一</sup>処、権現和光誓依<sup>、</sup>「忝<sup>ナ</sup>」当社<sup>、</sup>辺召置<sup>、</sup>有<sup>ニ</sup>御扶持<sup>一</sup>也（後略）

（池上洵一校注『三國伝記（下）』、中世の文学、四二頁）

と、真源が東塔南谷の勝陽房に住し嚴算について教えを受けていたことが記されている。<sup>(8)</sup>

また彰考館本『僧綱補任』<sup>(9)</sup>には、

天承元年（一一三一） 真源 二会 天台宗

とあり、「天台二会講師次第」<sup>(10)</sup>にも「真源<sup>天承元</sup>」と記されることから、天承元年（一一三一）に天台二会（法勝寺大乗会・円宗寺最勝会）の講師を勤めていたことが知られる。『中右記』大治二年（一二二七）一二月三日条にみえる法成寺八講では「雖凡僧以真源一問令勤仕也」と凡僧であった真源が、長承元年（一一三二）五月二三日条の最勝講に至っては「三礼已講信源」と已講になっており、この間に円宗寺法華会の講師を勤めていたことが

知られ、「証揚律師」(『長西録』)、「勝陽房真源法橋」(『三国伝記』)の呼称からその後僧綱に任じられたことは明かである。他にも『中右記』からは春季御読経・法勝寺三十講・法勝寺一切経供養・尊勝寺八講・法成寺八講・法成寺孟蘭盆会等に出仕していたことが記されており、また曼珠院本『七仏薬師法代々日記』<sup>(12)</sup>には、

#### 一 相覚法眼修之日記

保安元年六月二十一日<sup>寅庚</sup>、於禁中被修七仏薬師法、伴僧

十二口、真源阿闍梨、永寛大徳、延懷大徳、延範大徳、教

猷大徳、惟順大徳、堂衆六人(以下略)

と、保安元年(一一二〇)、藤原茂子の国忌にあたる六月二日に薬師法を修していることが知られる。

以上の史料からは論議問答に秀で、三会講師を経て僧綱に任じられ権門の法会に出仕する真源の学侶としての姿を窺い知ることができる。なお妙蓮寺蔵「松尾社一切経」の『大方等大集経』には「以梵尺寺之本 以勝陽房法橋之本二交了」(卷二六、「以勝陽房法橋本交了」(卷二九)とその校合に真源所持本が用いられており、これらも真源が学侶であったことの証左と言えよう。<sup>(13)</sup>

## 2、著述

真源の著述については諸目録により以下の七点を知り得る。

### 『長西録』<sup>(14)</sup>

往生要集裏書

一卷 真源<sup>証揚律師  
山僧</sup>

往生要集依憑記

三卷 同

順次往生講式

一卷<sup>永久二年甲午  
十二月十五日</sup> 真源<sup>日本天台</sup>

自行念仏私記

一卷<sup>二十二丁</sup> 真源<sup>山法相</sup>

### 『仏典疏鈔目録』<sup>(15)</sup>

四十八願釈

一卷<sup>天台真源述  
未流行</sup>

### 『本朝台祖撰述密部書目』<sup>(16)</sup>

伝教大師五十徳文<sup>勝陽坊真源述、破、上ノ五云是藏別卷</sup>

### 『諸宗章疏録』<sup>(17)</sup>

松養坊真源

破邪弁正記二卷<sup>惠什疑伝教血脈  
真源教彼疑</sup>

これらの中、従来現存とされてきたのは『順次往生講式』<sup>(18)</sup>天台宗遮那経業破邪弁正記(以下『破邪弁正記』)の二部のみであり、先行研究では浄土教典籍、歌謡史料といった観点から専ら『順次往生講式』<sup>(19)</sup>が注目され、『破邪弁正記』が組上にあげられることはなかった。

『破邪弁正記』二巻は『天台宗全書』七巻に収録されており（底本は伊勢西来寺竹田房所蔵写本）、内容は天仁元年（一一〇八）濟朝阿闍梨（仁和寺恵什）からなされた台密相承に対する疑義（現存せず）への反駁であって七章二〇門で構成される。本書について「天台宗遮那経業破邪弁正記縁起」にはその述作の理由が述べられているが、その末尾では、

于時天仁二年（一一〇九）己丑臘月黒半九日甲午。延暦寺

天台宗兼学真言止観両業末葉。根本正法蔵唐院真言蔵下司

釈薬雋謹疏此記

（『天台宗全書』七、一八九）

と撰者を薬雋としている。薬雋と真源の關係は明かでないが、真源撰『破邪弁正記』に別人物である薬雋が「縁起」を附したのでないことは巻下末の「雋才猶浅而年已老」<sup>(20)</sup>の記述により明らかである。ただし果宝（二三〇六―三六二）の『玉印抄』には、

東寺中古学者恵什阿闍梨頻加疑難。山門真源法橋破邪弁正

記中聊雖述会通更以不叶理

（『桐尾コレクション』顯密典籍文書集成「縁起・血脈篇」二、一六五）

仁和寺恵什阿闍梨疑難伝教大師御相承血脈譜。松養房真源法橋為救彼難製破邪弁正記二巻了

（前掲書、四〇二頁）

の記述がみられ、これに信を置くならば薬雋と真源は同一人物とも考えられるが、現時点でそれを立証する記述はみられな

い。よって拙論ではひとまず撰号により本書を薬雋の述作と捉え考察の対象から外すこととする<sup>(21)</sup>。

なお『本朝台祖撰述密部書目』にみえる『伝教大師五十徳文』はその注記「破、上ノ五云是載別卷」により『破邪弁正記』を依拠として立項したものと考えられるが、『本朝台祖撰述密部書目』が『玉印抄』をもとに附注していることを勘案するならば本書も『破邪弁正記』と同様に薬雋の著述と考えるべきであろう。

以上、諸目録によれば真源の著述は七点を数えることができるが、拙論では上述の理由により『破邪弁正記』『伝教大師五十徳文』を除外した五点を真源の著述として以下考察を進めていく。<sup>(23)</sup>

## 二、『往生要集裏書』について

### 1、先行研究の検証

前述の『長西録』『総浄土依憑章疏』にみられた『往生要集』末疏は『往生要集』が如何に読まれたかを窺う上での根本史料となるものであるが、従来仏教学において広く認知されていたのは黒谷（法然）撰『往生要集料簡』『往生要集釈』の二点のみであり、史料の収集は重要な課題であった。このような状況の

中で佐藤哲英氏は古刹・文庫を探訪され、昭和四三年（一九六八）に名古屋真福寺から平基親撰『往生要集勘文』『往生要集外典鈔』を発見・紹介すると共に、既知の文献であった良忠（一九九―一二八七）撰『往生要集義記』（以下『義記』）にそれら逸文を索求し紹介された。これにより真源撰『往生要集裏書』については『往生要集勘文』（断簡）所引の五文、並びに『義記』所引の三文の逸文が知られているのが現状である。<sup>23</sup>

この佐藤氏が発見された写本は外題を「天台往生要集」とする合綴本で、粘葉装、紙数二八丁、前欠、押界（毎半丁七行）、「文暦二年<sup>大正</sup>己未（二三五）七月十六日書了」の奥書を有し、内容は「前欠断簡」（一一―四丁）、『往生要集外典鈔』（二四―二五丁）、『源信書状、周文徳返報』（二五―二八丁）からなるものであるが、この「前欠断簡」について佐藤氏は、

昭和四十三年の調査の際に『天台往生要集』という奇妙な書目が目についたので借覧してみると、鎌倉初期の文暦二年の写本で、たしかに『往生要集』に関係した書物ではあるが、主部が欠けていて書名も著者もわからないものであった。しかしその後半に平基親の『往生要集外典鈔』があつて完本らしいことがわかった。そこで昭和五十二年八月に再び出かけて調査したところ、首部を欠いたものは平基親の『往生要集勘文』の断簡だと見当がついた

（佐藤『前掲書』資料編、二〇頁）

と、平基親撰『往生要集勘文』の断簡として紹介されているが、如何なる理由で見当をつけられたのかは述べられていない。想定される方法は『義記』に引用されている『往生要集勘文』逸文との比定であるが、そうでないことは『義記』に引用された『往生要集勘文』（二三文）と「断簡」（八文）を対照され、平基親の『往生要集勘文』は六卷ありて相当大部の著作であつたらしく、名古屋真福寺から検出された断簡と、上記の一三文とは殆ど重複していないようであるが（以下

略）（佐藤『前掲書』研究編、二二六頁）

と述べられていることから明らかである。  
結局、佐藤氏が何に拠つて「前欠断簡」を平基親撰『往生要集勘文』の断簡と判断したのかは不明であり検証することはできないが、『大日本史料』第一編二三、「往生要集裏抄」の項には注記として、

本書、粘葉装ニシテ、毎半葉七行ニ書セリ、モト、全六十四葉ニ、真源撰往生要集裏書・平基親撰往生要集外典抄・源信書状及ビ周文徳返報ヲ書写セルモ、今、往生要集裏書ノ途中ヨリ二分シテ、前半三十六葉ハ、往生要集裏抄ト題シ、後半二十八葉ハ、天台往生要集ト題シテ架蔵セラレタリ  
（一一三・一一四頁）

と記されており、「天台往生要集」の前欠に相当する箇所が『往生要集裏抄』の書名で架蔵されていること、佐藤氏が『往生要集勘文』として紹介された「前欠断簡」が真源撰『往生要集裏書』の後半部であること、等が指摘されている(図1参照)。

そこで「往生要集裏抄」と「天台往生要集」(「前欠断簡」)を  
実見し比較してみると、両者は共に半葉七行で手も同じとみられ、「本文云……」「裏云……」と同じ体裁で構成されている。

さらに分断箇所は「裏云、観仏三昧経云……」と『観仏三昧海経』巻六からの引文であり(もしくは『法苑珠林』からの間接引用か)、「往生要集裏抄」の末尾「狗寶即閉。四門皆塞唯」と「前欠断簡」の冒頭「正門開。婢即覆面以扇自障」が連続していることは内容上からも確認することができる<sup>(26)</sup>。

このように形態・内容の両面において両書は本来一帖と考えられ、佐藤氏が紹介された「前欠断簡」が「往生要集裏抄」の後欠部に相当することは明かである。「往生要集裏抄」の内題には「往生要集裏書」とあり、その内容は『義記』に「裏云」として引用されている三文の中、二文と一致することから(一致しない一文については後述)、佐藤氏が『往生要集勘文』として紹介された「前欠断簡」は真源撰『往生要集裏書』の後半部であり、さらにその前欠部分も現存していることが確認できた。

以上、先行研究を検証し原本調査を行うことで従来佚書と考

えられてきた『往生要集裏書』が名古屋真福寺に現存すること  
を明らかにし得た。従来、逸文しか知られていなかった『往生要集裏書』の全体像が確認されることは、『順次往生講式』の  
撰者としてのみ研究対象とされてきた真源に対し新たな観点を  
供するものであり、また一連の『往生要集』注釈書を考察して  
いく上でも貴重な新出史料といえよう。

## 2、諸本紹介

本節では現存する『往生要集裏書』の書誌情報を中心に紹介

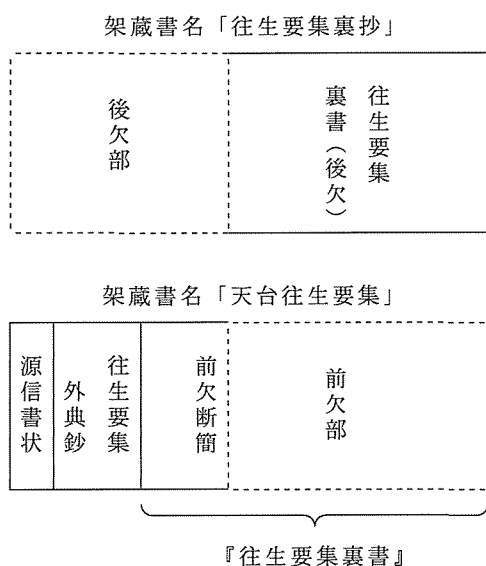


図1

していく。原本調査により現存が確認されたのは前節で言及した真福寺蔵本（以下、真福寺本）、神奈川県立金沢文庫蔵「往生裏書」（以下、金沢文庫本）の二帖である。

#### ○真福寺本

名古屋真福寺所蔵。鎌倉期写本。楮紙。每半丁七行で一六一八字。押界。法量は縦二五〇mm、横一六二mm、界高二〇五mm、界幅一九mm。

原装は同筆の『往生要集外典抄』（四九一六〇丁）『源信書状、周文徳返報』（六〇一六三丁）と合綴される全六三丁の粘葉装一帖であり、その中一四九丁が『往生要集裏書』に相当するが、前述の通り『往生要集裏書』の中途（三五―三六丁間）で二分され前半部が「往生要集裏抄」、後半部が「天台往生要集」の名で架蔵されている。各帖の首には「尾張国大須／宝生院経蔵／図書寺社官／府点検之印」の単郭方朱印が捺されており、分断の時期が文政四年（一八二二）の寺社奉行の点検時以前であることが知られる。<sup>(27)</sup>

「往生要集裏抄」は後欠。表紙中央に外題「往生要集裏抄」、右下隅に箱番号「二十七合」、左下隅に「慶西之」と打付け書きされる。慶西については不明。内題は「往生要集裏書<sup>上巻</sup>」。「天台往生要集」は前欠。表紙左上に外題「天台往生要集」、

右下隅に箱番号「第九十八合」と打付け書きされる。『往生要集裏書』自体の本奥書は見られないが、同筆で書写されている『源信書状、周文徳返報』の末には、

文暦二年<sup>大才</sup>己未七月十六日書了

と、全帖の書写奥書と思われる記述がみられ、『往生要集裏書』の書写も文暦二年（一二三五）頃と考えられる。

本書内題には「往生要集裏書<sup>上巻</sup>」と「上巻」の記述がみられるが、本書末には『往生要集』大文第十問答料簡の「十輪經偈云被恒河沙仏解脱幢相衣」の文が注釈されており、本書の注釈対象が『往生要集』と逐次的に配列されていることを勘案すれば分量的に本書と別に『往生要集裏書<sup>下巻</sup>』が存在するとは考え難い。

#### ○金沢文庫本

神奈川県立金沢文庫所蔵（資料番号九〇・一〇）。鎌倉期写本。書写年次・書写者は不明。楮紙。粘葉装。現存一四丁の残欠本。每半丁七行、一行二〇―二三字。押界。法量は縦二三三mm、横一五一mm、界高一九五mm、界幅一八mm。前後欠の為、外題・内題・尾題等は確認できない。二丁裏（往生裏書 □丁・四丁裏（往生裏書 □□）・六丁裏（往生裏書 □□）・八丁裏（往生裏書 七丁）・一〇丁裏（往生裏書 八丁）・一二丁裏（往生裏書 九

丁)・一四丁裏(往生裏書 十丁)の各継目に「往生裏書 ○丁」の丁付けがみられ、これに基づき書名を「往生裏書」と仮題し架蔵されたものと考えられる。二丁裏―三丁表間、六丁裏―七丁表間に錯簡が認められる<sup>(30)</sup>。

真福寺本は全四九丁であり、『往生要集』の引用(本文云……)とその注釈(裏書云……)を合わせて一項目とすれば三六項目から構成されていることとなる。一方、金沢文庫本は前後欠の一四丁で九項目を有している。両者を対照すれば誤字・脱字の類、異体字・抄物書等の字体の相違はみられるものの内容は一致し、金沢文庫本が真福寺本の六丁表、七行目から二一丁裏、四行目に相当する断簡であることが知られ、真福寺本を完本とすると金沢文庫本の現存箇所は凡そ三割に相当する。

以下本稿では特に断らない限りより多くの本文を有する真福寺本を以て『往生要集裏書』とし考察を進めていく。

### 3、撰者

前掲の『長西録』では本書の撰者を「真源<sup>証揚律師</sup>山僧

『依憑誌記』上中下<sup>真源法橋付所引經論 一々檢其文各々注其卷</sup>行年三十七

と真源の著述とするのに対し『往生要集裏書』は、『裏書』上下 少々本説等檢之。未知誰人作と撰者不明とされている<sup>(31)</sup>。

真福寺本、金沢文庫本は共に撰号がみられないが、真福寺本には「本文云」として『往生要集』大文第五助念方法「一応思念四十八願<sup>(32)</sup>」を引用する箇所に「四十八願有別紙」の細注がみられる。興隆(二六九―一七六九)撰『仏典疏鈔目錄<sup>(33)</sup>』には「四十八願積 一卷<sup>天台真源述 未流行</sup>」と真源に『四十八願積』の著述があったことを伝えており、本書を「別紙」と考えることが許されるならば『往生要集裏書』も真源の著述と認められよう<sup>(34)</sup>。

### 4、内容

本書は「本文云……」として『往生要集』を抄出し、それに対し「裏書云……」「裏云……」として(裏書云)と記載されない場合もあり注釈を施すといった形で構成されており、『往生要集』の抄出とその注釈は以下の三六項目に及ぶ。

#### 【『往生要集』の抄出とその注釈】

##### ○大文第一厭離穢土

1、本文云、復有頽部陀等八寒地獄具如經論不遑広述之

(三七a、一一―一二)



- 裏書云、八寒地獄者『俱舍論』云……。
- 2、本文云、雇鹿杖自害  
裏書云、『十誦律』云……、『四分律』云……。  
(三八c、一二)
- 3、本文云、引法句譬喻經偈云非空非海中非入山石間  
裏書云、『法句經』第二云……。  
(三九a、一三一—四)
- 4、本文云、譬如野干失耳尾牙詐眠望脱忽聞断頭心大驚怖  
裏書云、『智度論』十三云……。  
(三九a、一三一—四)
- 5、本文云、如經偈云一人一劫中所受諸身骨常積不腐敗如毘布  
羅山  
裏書云、『西域記』云……。  
(三九c、一三一—四)
- 6、本文云、大經云生人趣者如爪上土墮三途者如十方土  
裏書云、『涅槃經』三十一云……。  
(三九c、一九—二〇)
- 7、本文云、利衰八法莫能免  
裏書云、利衰毀譽稱譏苦樂  
(四〇a、九—一〇)
- 8、本文云、如馬鳴菩薩賴吒和羅伎声唱云(四〇b、一五—一六)  
裏書云、『弘決』第一……。  
(四〇c、五)
- 9、本文云、祇園寺無常堂四隅有頗梨鐘  
裏書云、祇園寺者……、『祇園図經』……。
- 10、本文云、雪山大士捨於全身而得此偈  
裏書云、『涅槃經』第十三云……。  
(四〇c、七一—八)
- 11、本文云、如痴狗追塊  
裏書云、『玄義』第二『積絶対妙中』云……、『積籤』云……。  
(四〇c、一〇)
- 12、本文云、西域記云婆羅痾斯国施鹿林東行二三里有涸池  
裏書云、婆羅痾斯国施鹿林者……、『智度論』云……。  
(四〇c、一三一—四)
- 大文第二欣求淨土
- 13、本文云、猶如盲龜值浮木  
裏書云、『弘決』……。  
(四五a、一〇—一一)
- 14、本文云、儒童捨全身而始得半偈  
裏書云、釈迦者燃頭仏時名為儒童  
(四五a、一一)
- 15、本文云、常啼割肝府而遠求般若  
裏書云、『大品』第三十九云……。  
(四五a、一二)
- 16、本文云、如彼身子等六十劫退者是也  
裏書云、『智度論』云……。  
(四五c、二八—二九)
- 17、本文云、象子力微身歿刀箭  
『止観』第七云……、『弘決』云……、『止観』問卷云……、『弘決』云……。  
(四六a、四)
- 大文第三極樂証拠
- 18、本文云、観音勢至本於是土修菩薩行転生彼国

『往生仏土經』云……。(四七a、三一四)

○大文第四正修念仏

19、本文云、調達誦六万藏經猶不免那落 (四九c、一二—一三)  
裏云、『報恩經』第四云……、『摩訶經』云……、『西域』云……。

20、本文云、慈童発一念悲願忽得生 (四九c—一三)

『弘決』引心論云……。

21、本文云、即引無行經喜根菩薩偈 (四九b、九)

『弘決』第八引此文云……。

22、本文云、三十七品是僧業 (五〇c、二七)

三十七品者四念処四正断四神足五根五力七等覺支八正道支

23、本文云、譬如波利質多樹花一日熏衣瞻蔔花婆師花雖千歲熏所不能 (五一b、一四—一五)

『釋籤』第七引涅槃經云……。

24、本文云、亦弥伽大士聞善財童子已発菩提心

(五一c、一一—一二)

『弘決』第一云……。

25、本文云、梵天不見其頂目連不窮其声 (五五c、二〇—二二)

『弘決』一引西域記云……。

○大文第五助念方法

26、本文云、一応思念四十八本願 (五八c、一七)

裏云、過去有仏名世自在王如来……。

27、本文云、令衆生離十二入故 (六六c、一五)

裏云、十二入者六根六境也、六根者……、六境者……。

○大文第七念仏利益

28、本文云、老女見仏邪見不信猶能除却八十万億劫生死之罪 (七一c、四—五)

裏云、『觀仏三昧經』云……。

○大文第九往生諸行

29、本文云、大象出窓遂為一尾所礙 (七八c、二二)

『頌疏』第九云……。

30、本文云、藥王本事避塵寰居雪山 (七八c、二四)

裏云、『文句』第十云……。

31、本文云、屠辺之殿好惡由何乎 (七八c、二六—二七)

『弘決』第一云……。

○大文第十問答料簡

32、本文云、鳩鳥入水魚蚌斯斃 (八三c、二二)

裏云、鳩鳥者『弘決』第八引郭王山海經及広雅云……。

33、本文云、旃檀樹出成時能變四十由旬伊蘭林普皆香美 (八三c、二八—二九)

裏云、『觀仏三昧經』云……、言牛頭者『華嚴』云……。

34、本文云、以鷄狗業樂求天樂是即惡見 (八五b、四)

『釈籤』第四云……。

35、本文云、其出家人亦有三類具如止觀第四 (八七b、二八)

裏云、『止觀』第四具五緣中第二衣食具足文云……。『弘決』云……、『止觀』云……、『弘決』云……。

36、本文云、十輪経偈云被恒河沙仏解脱幢相衣

(八八b、二一—二二)

裏云、『地藏十輪経』云……。

※(一)内は『大正蔵』八四卷の頁数・段・行数。

これらは内容別に類従されることなく『往生要集』の十大文に従って配列され、各注釈もそれ自体で完結しており相互に係して思想等を明示するといった体系的なものではない。注釈の内容は大別して二つに分類され、一方は、

7、本文云、利衰八法莫能免

裏書云、利・衰・毀・譽・称・譏・苦・樂

14、本文云、儒童捨全身而始得半偈

裏云、釈迦者燃頭仏時名為儒童

等、語句の説明であり、1「八寒地獄」、22「三十七品」、27「十二入」等に付される。もう一方は、

13、本文云、猶如盲亀値浮木

欣・眞・淨・土・見・位・圓・法・衆

裏云、弘決如大海中有一盲亀。爾時海中復有浮木。木唯一孔可立亀身。此亀三千年方得一出億百千出。何由可値浮木之孔

等、本説の提示である。それら本説の内容はいずれも「譬喩」(例証・たとえ)もしくは「因縁」(起源・本説・縁起)であるが、これらは『往生要集』において「如盲亀値浮木」等、抄出もしくは成語として用いられており、これに対して「弘決如大海中有一盲亀。爾時海中復有浮木。木唯一孔可立亀身。此亀三千年方得一出億百千出。何由可値浮木之孔」と先行する本文・本説・物語が注釈として提示される。良忠は『往生要集抄』第四冊末において、

此集『往生要集抄』…筆者注 具書事(中略)

裏書上下 少々本説等檢之未<sup>マ</sup>知誰人ノ作 或云真源

(叡山文庫調査会編『前掲書』、四三頁)

と言及され、『往生要集裏書』を『往生要集』所載の文に対する本説を集録したものと捉えられている。この認識の通り注釈の大半は経論釈の引用による本説の提示であり、そこに真源の私釈は皆無である。また注釈の対象とされる本文も『往生要集』において教義上特に問題となる箇所ではない。<sup>(36)</sup>

なお『往生要集』の本説としては「俱舍論」(一)、「十誦律」(2)、「法句経」(3)、「智度論」(4・12・16)、「西域記」(5・19)、

「涅槃經」(6・10)、「弘決」(8・13・16・17・20・21・24・25・31・32・35)、「祇園図經」(9)、「玄義」(11)、「釈籤」(11・23・34)、「大品」(15)、「止観」(17・35)、「往生浄土經」(18)、「報恩經」(19)、「摩訶經」(19)、「無量寿經(經典名明示せず)」(26)、「観仏三昧經」(28・33)、「頌疏」(29)、「文句」(30)、「華嚴」(33)、「地藏十輪經」(36)等が引用されているが、(一)内は前掲『往生要集』の抄出とその注釈の冒頭番号、このうち「十誦律」(2)、「法句經」(3)、「智度論」(4・12・16)、「華嚴」(33)等は実際に原典(『大正藏』に拠る)と対照してみると必ずしも一致しない(後掲、資料一参照)。これらは真源による原文の抄出と捉えるよりも、寧ろ『止観輔行伝弘決』(もしくはその影響下の典籍)による間接引用と考えるのが妥当であろう。

このような間接引用も合算すれば『止観輔行伝弘決』の引用回数は一六回となり、真源の注釈の主要な典拠と言い得るが、これは当時の教学研究の中心が所謂天台三大部とそれらの注釈書である湛然述『法華玄義釈籤』『法華文句記』『止観輔行伝弘決』であったこと、そのうち最も説話的記述(譬喩・因縁)を有するのが『止観輔行伝弘決』であること<sup>(37)</sup>を思い合わせれば当然の結果と言えよう。

## 5、後世への影響

最後に本書が後世において如何なる形で享受されたのかをみていきたい。まず想起されるのは「長西録」にみられるように『往生要集』注釈書の嚆矢として同じく『往生要集』注釈書に享受される場合である。良忠撰『義記』には先行研究により以下三文の『往生要集裏書』逸文が従来指摘されてきた。

a、又彼裏書云。且依法華。以六道為正<sup>上</sup>。

〔浄全〕一五、一九三

b、祇園寺無常堂四角有頗梨鐘等者<sup>有本無之</sup>。

裏書云。祇園寺者。舍衛國給孤独也。須達多長者名曰給

孤独。

依之言給孤独園。又曰祇陀林。本是祇陀太子林也。故言

祇陀林。又曰逝多林。

〔浄全〕一五、二一〇

c、儒童捨全身等者。問。裏云。釈迦如来然燈仏時。名為儒

童云。

〔浄全〕一五、二三一

ただし、このうち逸文aは真福寺本、金沢文庫本の何れにも確認できない。逸文aは逸文b・cが単に「裏書云……」「裏云……」と記されるのに対し、「彼の裏書に云く」と記されており、またその注釈内容も先述の語句説明・本説の提示の何れにも該当するものではない。『義記』においてこの文は、

問。五道六道開合何經論說。(中略)授決集<sup>五道六道決</sup>謂。浄名經

時我程者。何別不立一道云成曠。故開為六道也。然而為正  
撰之鬼畜故<sup>註</sup>。又彼裏書云。且依法華。以六道為正<sup>註</sup>

〔淨全〕一五、一九三—一九四

と、五道六道の開合の問題に関して引用されており、形式・内容の何れもが現在確認されている『往生要集裏書』と合致しないことを勘案してこの文脈を読めば、これは『授決集』の裏書であろうことが推測され、『義記』所引の『往生要集裏書』逸文は二文ということになる。

ただしこれが『義記』における『往生要集裏書』享受の全てではない。従来は看過されてきたが、両書の本文を対照することにより『往生要集裏書』を参照したと考えられる箇所として、以下が指摘できる。

### 【『義記』における『往生要集裏書』の享受】

#### 『義記』第一

頌曰頽部陀寿量如一婆訶麻百年（中略）是謂八寒地獄寿量

（一八七下、八一—一六

此八並居瞻部洲下

（一八八上、五

#### 『義記』第二

十誦律云仏在跋耆国婆求河上（中略）爾後改觀令修特勝

（一〇〇下、一一—一二）

法句經第二云有梵志兄弟四人（中略）四者已病不可不死

（二〇一上、一六—下九）

大論十三云譬如野干（中略）死事不奢自知無冀

（二〇二下、一三—二〇二上、七）

西域記云摩揭陀国西北有毘布羅山

（二〇五上、一七—下一）

彼經卅一云爾時世尊取地少土（中略）如十方界所有地土

（二〇六上、五一—三）

利衰毀譽称譏苦衆

（二〇七上、八）

裏書云祇園寺者（中略）二鐘上去各還本土

（二一〇下、二—一五）

大經第十四云善男子（中略）成阿耨菩提

（二二〇下、一五—二二二上、一六）

玄義第二釈絶待妙中云（中略）種智師子得理亡名

（二二二下、二—一七）

施鹿林東者因縁出大論如伝通記引

（二二三上、一五）

#### 『義記』第三

弘決云如大海中有一盲亀（中略）何由可値浮木之孔

（二二三上、一五—一七）

裏云釈迦如来然燈仏時名為孺童

（二二三下、五）

大品三十云仏告須菩提（中略）諸仏国随願往生

（二三三下、一一—二三三下、四）

大論十二云如舍利仏（中略）不如自度早免生死

（二三四上、三一二）

止観第七云若小象子雖捍刀箭（中略）今且六根為大象

（二三四下、三一八）

往生浄土経摩那斯羅女早離速離因縁思之

（二三七下、六）

#### 『義記』第四

弘八引無行経喜根偈云（中略）爾時勝意即我身是

（二五三上、九―二五四上、六）

大方便仏報恩経云復次提婆達多（中略）不能免阿鼻地獄

（二五五下、三一五）

弘決五引観心論云慈童女長者（中略）発弘誓願即属仏界

（二五六上、六一二）

釈籤七引涅槃経云二十三天（中略）爾時夏三月在下受樂

（二六〇上、一二一―一七）

弘一云初託胎時於其宮内（中略）漸漸南行百一十城

（二六一下、一四一―一七）

#### 『義記』第五

弘一引西域記云昔婆羅門（中略）例然出大論十一

（二七二上、四一―二七三上、五）

#### 『義記』第七

経云仏在世時舍衛城中（中略）虚空中作十八變

俱舍九云王作此十夢来白世尊（中略）如尾礙窓  
（三三三上、一二―三三四上、六）

昔仏末法有四比丘（中略）昔時王者今華德菩薩是也  
（三三九下、一四―三四〇上、二）

弘決一云如昔華氏国有一白象（中略）見惡為害況復人乎  
（三四〇上、一三一―下、一六）  
（三四一上、四一―二）

#### 『義記』第八

止観第四具五縁中第二衣食具足（中略）即便知足下土也

（三六五下、三一―二）

地藏十輪経四云（中略）皆共誠心帰敬三宝

（三六七下、一〇―三六八上、一六）

※（ ）内は『浄土』一五巻の頁数・段・行数

これらの文の多くは「裏書云……」という形式をとっていないが、既に『往生要集裏書』が言及する所である（ただし引用箇所等が一致しない例もみられるが、それらは『往生要集裏書』を指南として良忠が出典に立ち返り取捨を行ったものか）。

このように『義記』における『往生要集裏書』の享受は従来認識されている以上のものであり、『往生要集裏書』は『義記』撰述<sup>(38)</sup>における主要ソースの一つであったと考えられる。

また他方で軍記文学・説話文学等への享受が想定される。『往生要集』大文第一厭離穢土にみえる「祇園寺無常堂四角有頗梨鐘<sup>39)</sup>」の文と『平家物語』巻第一「祇園精舎」の冒頭、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり<sup>40)</sup>」の関連は後藤丹治氏によって指摘されているが、これを承けて黒田彰氏は、

往生要集（祇園寺図経）の説を前提として、それを注釈的に補填しなければ、「祇園精舎」云々の一節は、十分に理解し得ない。（中略）平家物語の「祇園精舎」云々の一節の作者また、享受者は、どのようにして往生要集（祇園寺図経）に、その理解の鍵となる説明のあることを知り得たのだろうか

（『中世説話の文学史的環境 続』一九九五、二二三頁）  
と設問され、清水有聖氏の報告に由り、

鐘楼ということに関し、中世、往生要集や祇園寺図経がやはり調べられ、それらの本文が抄出されていたのである。

加えて、それら因縁譚の蒐集、抜書は、澄憲表白集などの表白等に見る句例の直接的裏付けをなし、共に唱導の場において供されることによって、往生要集（祇園寺図経）の所説流布の窓口を形作っていた（『前掲書』、二二三頁）

と、『往生要集』（祇園寺図経）と『平家物語』の間に唱導書の類の介在を指摘された。

その他「祇園精舎の鐘の聲」の類似表現としては『澄憲表白

集』『転法輪抄』『因縁処』『法華経勸進抄』『天台論草』『草木成仏・仏果空不・三諦勝劣・分証報如是・自受用所居』『色葉歌註釈』『涅槃和讃』等が紹介されているが、このうち安居院流の唱導書に依存しつつ真言僧用に改訂されたテキストとされる真福寺蔵『因縁処』（一二五頃成立か）四、鐘の項には「経論釈所」として『雜宝藏経』『大集経』『増一阿含経』『華嚴経』『雑花経』『付法藏経』と共に『祇園図経』『往生要集』が引用されており、その引用箇所は『往生要集裏書』所引のものと一致している<sup>41)</sup>。ただし『往生要集裏書』と『因縁処』の関係は、他の唱導書にも多くの類似表現が見受けられることから直接的なものではなく、黒田氏の指摘されるように「中世、往生要集や祇園寺図経がやはり調べられ、それらの本文が抄出されていた」と考えるのが妥当であろうか。いずれにせよ『往生要集』（祇園寺図経）所説の伝播経路としては、

道宣『中天竺（舍衛国）祇園寺図経』→源信『往生要集』→  
↓唱導書→『平家物語』等

という形が想定されるが、この伝播経路において『往生要集裏書』は年代的に澄憲（一二二六―一二〇三）を始祖とする安居院流唱導に先行するものであり、『往生要集』と軍記文学・説話文学<sup>42)</sup>等を介在するものとして『往生要集』の後代における受容を考察する上での貴重な史料と言えよう。

なおこのような周辺領域における享受は注釈内容の多くが譬喩・因縁であるという本書の性格に起因するものである。中世の学問では「本文」を知悉していることが真俗を問わず要件とされており、院政期に遡る唱導の沿革・方法・実態等の具体的な消息を知る上で希有な記録である醍醐寺三宝院蔵『転法輪秘伝』<sup>(44)</sup>には、

譬喩因縁・伝記目錄才学、此処相叶、タハウテコ、ニ取出也

と記され、また『今昔物語集』『河内守、依慳貪感現報第三六』には、

此ノ(守)年老タレバ、昔ノ観經(説教カ)共ヲモ吉ク聞キ集メタラム。又才モ只今ノ極メタル者ナレバ、可然キ因

縁・譬喩モ聞キ知タラム (新日本古典文学大系「三六、二九五頁」)

と唱導において譬喩・因縁といった例証・本説・故事を重視する姿勢が窺え、また前章で窺った真源の学侶としての姿や法会への出仕、さらに『順次往生講式』の撰述を勘案すれば本書も唱導の為の手控えである可能性も考えられよう。

ただし真源自身が裏書として本説を付したのか、或いは他者の手になる先行する『往生要集』の裏書を真源が編集することによって真福寺本の形態となったのか、更に真福寺本が『裏書』本来の形を伝えているのか、もしくは原初形態からの抄出

本であるのか等々、本書の成立・撰者に関しては未だ不明な点も多く、直ちに現存する真福寺本に因って真源と唱導を結びつけることは早急であろう。ただし『長西録』には安居院流の唱導を大成した澄憲の著述として「六道惣釈 一卷」の書名がみられるが、そこには細註で「延暦真源章集之」<sup>(45)</sup>と記されており、これなどは真源の著述が唱導用に編纂された事例といえよう。

## 結

以上、先行研究を検証し原本調査を行うことで、従来佚書と考えられてきた『往生要集裏書』が名古屋真福寺、県立金沢文庫に現存することが判明した。その結果、本書の内容・構成が明らかにになったが、現存する『裏書』における注釈の多くが『往生要集』に抄出された譬喩・因縁を対象としたものであることから、本書の撰述意図はそれら諸経論釈から抄出された譬喩・因縁の「本文」の提示であり、『往生要集』に説かれる教義・思想等の検討・理解にはないと考えられる。つまり本書の性格は思想書ではなく資料集として捉えられ、このような譬喩・因縁の手控えは単に『往生要集』注釈書に留まらず、軍記文学・説話文学等に享受される要因を孕むものといえよう。



『往生要集裏書』の全体像が確認されたことは、『順次往生講式』の撰者としてのみ研究対象とされてきた真源に対し新たな観点を供するものであり、また本書の影響下に成立した『往生要集義記』の読解にも有用な史料となるものである。ただし本書の成立に関しては未だ不明な点も多く、これらの点の解明は今後の課題としたい。

本稿は韓国日本文化学会（二〇〇四・一〇・三〇、於韓瑞大学校）における口頭発表を成稿化し加筆修正したものである。

末筆ながら貴重な資料の閲覧に当たり、御高配賜りました宝生院貫首・岡部快圓様ならびに宝生院御当局、称名寺住職・須方隆證様ならびに高橋秀榮様をはじめとする県立金沢文庫御当局に衷心より甚深の感謝を申し上げます。

#### 註

- (1) 『大正蔵』八四、三三a。
- (2) 『新訂増補国史大系』一一二、二五六。
- (3) 『日仏全』一、三四六。
- (4) 『日仏全』一、三六二。
- (5) 『日仏全』一二三、二七〇。
- (6) 平林盛得・小池一行編『五十音引僧綱補任僧歴綜覧』、

一九七六、一七二頁参照。なお「興福寺本」と「彰考館本」の関係については『同書』解題を参照。

- (7) ただし『青蓮院門跡吉水藏聖教目錄』（二三七―三三八頁）、『菩薩羯磨戒文』（四一箱三）には、

康和三年（一一〇二）二月十四日書了／書本円成房本 件  
本以前唐院御本被写之（朱書）唐院御本云 楞嚴之本（於  
点者私。以斟酌後日重可直之）／私云菩薩戒義記出六本中  
之梵網本者

是也。餘四句／幸囑真文隨喜之涙不能抑留。以書写功必為

仏□（恩カ）／釈真源記

の書写與書がみられる。興福寺本『僧綱補任』の保延二年七三  
歳没の説を採れば康和三年の時点での年齢は三七歳となり書写  
與書と整合しない。彰考館本『僧綱補任』の保延三年七七歳没  
説を採れば、康和三年の時点で四一歳（或いは八〇歳没説で  
四四歳）となり、康和三年（一一〇二）頃に「四句」とする記  
述に合致する。

- (8) 叡算と真源の関連は「日本天台宗系譜」（上杉文秀『日本天台史』付録、一九三五）にもみられる。

- (9) 平林・小池『前掲書』、一七二頁。

- (10) 「諸寺別当并<sup>天師</sup>講師等次第」（京都府立総合資料館『資料館紀要』一八、一九九〇）一四九頁。

- (11) 『中右記』天元元年（一一〇八）五月二十九日、同一二月三日、天永二年（一一一一）二月三日、天永三年（一一一二）五月一二日、永久五年（一一一七）七月一日、元永二年（一一一九）二月三日、保安元年（一一二〇）七月一日、大治二年（一一二七）二月三日、長承元年（一一三二）五月二三日、同五月二四日、同五月二七日、同一月二九日、同

編『国語国文』七四―五、二〇〇五）によって指摘されている。

- (43) 山崎誠「学侶と学問」(説話の講座三『説話の場―唱導・註  
釈―』、一九九三)、池田源太「平安時代に於ける「本文」を権  
威とする学問形態と有職故実」(『奈良・平安時代の文化と宗  
教』、一九九七) 参照。

- (44) 阿部泰郎「唱導―唱導説話考―」、二一頁(説話の講座三  
『説話の場―唱導・註釈―』、一九九三)。

- (45) 『日仏全』一、三五〇。

# 補注

真源のもう一つの『往生要集』注釈書である『往生要集依憑記』は  
従来佚書とされてきたが、本稿脱稿後、東寺観智院金剛藏藏本(仁  
安二年写)が善裕昭氏によって紹介された(「真源『往生要集依憑  
記』について」、『浄土宗学研究』三二、二〇〇六)。

『智度論』、『止観輔行伝弘決』、『往生要集裏書』の比較

『智度論』卷第十一

『止観輔行伝弘決』卷第三之四

『往生要集裏書』

如舍利弗。於六十劫中行菩薩道。欲渡布施河。時有乞人來乞其眼。舍利弗言。眼無所任。何以索之。若須我身及財物者當以相与。答言。不須汝身及以財物。唯欲得眼。若汝实行檀者以眼見与。爾時舍利弗。出一眼与之。乞者得眼。舍利弗前嗅之。嫌臭唾而棄地。又以脚踐。舍利弗思惟言。如此弊人等難可度也。眼實無用而強索之。既得而棄又以脚踐。何弊之甚。如此人輩不可度也。不如自調早脱生死。

(『大正藏』二五、一四五 a)

故大論十二云。舍利弗六十劫中行菩薩行。有婆羅門從其乞眼。舍利弗言。當乞有所堪者。此眼無堪。婆羅門言。不須身及財物唯須於眼。若汝实行檀者。當以眼与我。便出一眼与之。婆羅門得已嗅之。語言。此眼臭唾而棄之以脚踐之。舍利弗言。此弊惡人何由可度。實無所用而強索之。不自度早免生死。

(『大正藏』四六、二五一 c)

本文云如彼身子等六十劫退者是也同裏云智度論云舍利弗六十劫中行菩薩行有波羅門從其乞眼舍利弗言當乞有所堪者此眼無堪波羅門言不□身及財物唯須□若汝实行□者當以眼与我便出一眼与之波羅門得也嗅之語此眼臭唾而棄之以脚踐之舍利弗言此弊惡人何由可度實無所用而強索之不自度早免生死云云

(金沢文庫本13ウー14オ)

『往生要集裏書』と同表現と考えられる箇所を実線で囲った。

# 真源（1064-1136）年表

康平 7（1064）		生誕（『僧綱補任』に記される寂年から逆算）
康和 3（1101）		『往生要集依憑誌記』撰述（尊経閣蔵『往生要集鈔』巻下第二）
天仁元（1108）	11 月	法成寺八講（『中右記』11 月 29 日条）
天永 3（1112）	5 月	春季御読経（『中右記』5 月 13 日条）
永久 2（1114）	12 月	『順次往生講式』撰述（『長西録』）
元永 2（1119）	11 月	法成寺八講（『中右記』11 月 30 日条）
保安 3（1122）	7 月	法成寺尊勝寺盂蘭盆会講（『中右記』7 月 15 日条） 国忌薬師法（『七仏薬師法代々日記』）
保安 4（1123）		二条東洞院殿安鎮法（『安鎮法日記』）
大治元（1126）		女院御祈（『七仏薬師法代々日記』）
大治 2（1127）	11 月	法成寺八講（『中右記』11 月 29 日条）
長承元（1132）	5 月	最勝講（『中右記』5 月 22 日条）
	11 月	法成寺八講（『中右記』11 月 29 日条）
長承 2（1133）	5 月	法勝寺三十講（『中右記』5 月 10 日条）
	5 月	最勝講（『中右記』5 月 24 日条）
	12 月 3 日	法橋に叙せられる（『僧綱補任』）
	12 月 4 日	法成寺論義の探題に勤使（『僧綱補任』）
長承 3（1134）	2 月	法勝寺一切経供養（『中右記』2 月 17 日条）
	5 月	最勝講（『中右記』5 月 22 日条）
保延元（1135）	5 月	最勝講（『中右記』5 月 21 日条）
	7 月	尊勝寺八講（『中右記』7 月 19 日条）
保延 2（1136）		寂（『僧綱補任』）